

【表紙・裏表紙解説】 あいち国文第14号

表紙写真は『宇曾替』、裏表紙写真は『みはしら』（愛知県立大学附属図書館蔵）。どちらも蘆陰舎百堂が編じた俳諧選集である。

『国書人名辞典』によれば、百堂は生没年未詳だが天保八年（一八三七）には生存しており、田辺氏、通称熊蔵。号、浪甫・竺齋・桃壺・柿壺（松字文庫俳書目録）。百堂・蘆陰（蔭）舎（三世）。百堂（蘆陰舎二世）の男。大坂堂島の米商で、父の後を嗣いで百堂・蘆陰舎三世を名乗ったとされる。

『宇曾替』は全一卷。半紙本。三〇丁。刊本。四つ目綴。篤老による文政七年（一八二四）の序と百堂本人による自序がある。

篤老は、安芸広島藩士で、俳句を学び、京都で高桑蘭更門にも入り、大阪で医業を営むも文化九年（一八一二）に帰郷して家督を継ぎ広島に蕉風を広めた飯田篤老か。

その序を見ると、篤老は先代の百堂ともあわせて父子

ともに交流があり、文政六年冬、百堂が大宰府や諏訪の御柱神事などに詣でた旅の記念として大宰府の神事にあつる篤替えにちなんで名付けた集の序を頼まれたことが記されている。

今回表紙に使用した絵は、彩色され、君山という署名が入っている。

『みはしら』は全一卷。二八丁。刊本。四つ目綴。後見返しに奥付として「色紙短冊御集冊摺物彫刻所へ京師高倉四條下ル町菊屋平衛門」とある。

文政甲申、つまり文政七年の禾木による序がある。そこには、「ことし浪華の蘆陰舎はいかなるねがひの欲にや有けんみす、蒞しなぬの国に杖を走らせ諏方のおほむ神にもうて奉りて実みはしらのひかりたふたきおほむ有さまを猶もつまひらかに綴りものして終に一集のおもむきとそ成せりける」とあり、前述の『宇曾替』との関連をうかがわせる。また、御柱祭が行われる諏訪だけでは

なく、同じ信濃地方の善光寺や戸隠山などの地名も俳題として見える。

巻末には長刀を持った人物と山の彩色画が描かれ、「巢兆」の署名がある。巢兆は江戸俳諧三大家の一人にも数えられ、谷文晁門下で書にも優れていた、江戸時代中期から後期に活躍した俳人・画家である建部巢兆か。

愛知県立大学附属図書館では、それぞれ二冊ずつ所蔵しているが、どちらも一方に藤園堂の印が入っている以外はほぼ同一のものである。

参考文献：『愛知県立女子大学附属図書館善本目録 国

- 語・国文学篇』、『国書人名辞典』（岩波書店）、『日本人名大辞典』（講談社）、『日本俳書大系十三 近世俳諧名家集』（日本俳書大系刊行会 一九二七）、『俳文学大辞典』（角川書店）、愛知県立大学図書館貴重書コレクション（<http://opac1.aichi-pu.ac.jp/kicho/kohaisyo/index.html>）

（文責：熊澤美弓）

とし強と

いはれて

嬉し松の花

歩、富

梅臥て

旭にみかく

色香かな 大魯

梅さくら紅葉ぬ

松は植たま、

不二

仰け只此虫の神

梅の神

大江丸

柳葉を

見るく

松の匂ひ哉

素榮

なかるらん

とり分て甚

素外

風に飛や神の

むかしの梅にはふ

宗因翁

うめか香にのつと日の出る山路かな はせを翁

萬代の

よき事諏訪の御はしら

才磨

みはしらや長刀持の顔の汗

関更

神宮寺

蕪村

涼しさや鐘をはなる、

かねの聲

夏山や得も

しらぬ花の

香に匂ふ

几董

若葉して不盡に

やさしき諏方の海

士朗